



日本GAP協会の会報誌「MONTHLY-J」が「JGAP+」にリニューアルいたしました。
JGAPがきっかけとなり、新しい人と人の出会い、新しい農産物の流通、
新しい農業ビジネスモデルの構築が各地で始まっています。
「JGAP、そしてその先へ」をテーマに、最前線をお伝えしていきます。

JGAPとは……

JGAPは、食の安全や環境保全に取り組む農場に与えられる認証です。JGAPは、農場やJA等の生産者団体が活用する農場・団体管理の基準であり、認証制度です。農林水産省が導入を推奨する農業生産工程管理手法の1つです。

J G A P T O P I C S

JGAPトピックス

「JGAP穀物2012」が発表、審査・認証もスタート

8月31日、JGAP穀物の最新基準となる「JGAP穀物2012」が発表され、翌9月1日より審査・認証が開始された。開発2年を要したJGAP穀物2012の特徴としては、①精米工程専用項目・麦専用項目の追加、②放射能に対応した管理点の設置、③農水省「農業生産工程管理(GAP)の共通基盤に関するガイドライン(米・麦)」に対応、④環境保全型農業の重視、⑤農薬使用における計画の改善と問題発見を促す項目の追加等が挙げられる。基準書の全てが日本GAP協会ホームページ(<http://jgap.jp/>)で公開されている。

JGAP
ジェイギャップ
Japan Good Agricultural Practice
(日本の 良い 農業の やり方)
農場用 管理点と適合基準

**穀物
2012**

2012年8月31日発行
2012年9月1日審査・認証開始

第1回「IT・標準帳票」部会が開かれる

9月27日、第1回「IT・標準帳票」部会が開催された。同部会はIT および流通に関係した会員からなり、「JGAPの基準をベースとした栽培情報(使用農薬履歴等)をやり取りする共通の書式の開発」を目的とする。部会長には、(株)アグリコミュニケーションズ・大野俊治氏(取締役ビジネス推進本部長)が選出された。

技術委員会・審査認証部会委員を選任

10月12日、JGAPの審査・認証制度を審議する技術委員会・審査認証部会の委員人事が決定した。6人の委員が再任、5人の委員が新任で選出された。委員は以下の通り(五十音順・敬称略)。内田修一(再任・ムーディー・インターナショナル・サーティフィケーション(株)食品認証マネージャー)、塩田彦隆(新任・(株)北海道有機認証センター・北海道GAP認証センターセンター長)、田實菜穂子(新任・ハラダ製茶(株)品質管理室主任)、田中隆(新任・(公財)日本適合性認定協会認定センター審議役)、玉造洋祐(再任・(株)ユニオンファーム代表取締役)、戸部依子(新任・(公社)日本消費生活アドバイザー・コンサルタント協会食生活特別委員会委員長)、中嶋康博(新任・東京大学大学院食料・資源経済学研究室教授)、並木章(日本トレーサビリティ協会事務局長)、服部一成(再任・服部果樹園)、浜端理恵(新任・(株)消費経済研究所品質管理センターダイエーテクノロジスト部食品担当)、藤井淳生(新任・(株)農水産ID)。

10月12日、JGAPの審査・認証制度を審議する技術委員会・審査認証部会の委員人事が決定した。6人の委員が再任、5人の委員が新任で選出された。委員は以下の通り(五十音順・敬称略)。内田修一(再任・ムーディー・インターナショナル・サーティフィケーション(株)食品認証マネージャー)、塩田彦隆(新任・(株)北海道有機認証センター・北海道GAP認証センターセンター長)、田實菜穂子(新任・ハラダ製茶(株)品質管理室主任)、田中隆(新任・(公財)日本適合性認定協会認定センター審議役)、玉造洋祐(再任・(株)ユニオンファーム代表取締役)、戸部依子(新任・(公社)日本消費生活アドバイザー・コンサルタント協会食生活特別委員会委員長)、中嶋康博(新任・東京大学大学院食料・資源経済学研究室教授)、並木章(日本トレーサビリティ協会事務局長)、服部一成(再任・服部果樹園)、浜端理恵(新任・(株)消費経済研究所品質管理センターダイエーテクノロジスト部食品担当)、藤井淳生(新任・(株)農水産ID)。

今月の新規会員ご紹介

飯田一(茨城県行方市・農業生産者)

葡萄園野村(長野県長野市・農業生産者)

株式会社アースコーポレーション(岩手県一関市・共業生産) <http://www.earth-co.jp/>

株式会社ユニバース(青森県八戸市・地域に密着した食品中心のスーパーマーケットの経営) <http://www.universe.co.jp/>

株式会社ローソン(東京都品川区・コンビニエンスストア「ローソン」のフランチャイズチェーン展開) <http://www.lawson.co.jp/>

東京シティ青果株式会社(東京都中央区・青果物及びその加工品の受託販売並びに購入販売) <http://www.city-seika.com/>

株式会社エムスクエア・ラボ(静岡県菊川市・ベジプロバイダー、製品デザイン・WEB制作、農業システムの提供、農業事業支援) <http://m2-labo.jp/>

特定非営利活動法人農業支援センター(茨城県土浦市・新規就農支援、JGAP取得支援、6次産業化支援) <http://www.nou-sien.org/>

日本電気株式会社(東京都品川区・ITソリューション事業、キャリアネットワーク事業等) <http://jpn.nec.com/>

株式会社野村総合研究所(東京都千代田区・コンサルティング、金融ソリューション等) <http://www.nri.co.jp/>

サーチ事業開発協同組合(東京都港区・組合の取り扱う原材料、備品、消耗品の共同購入ならびに斡旋等) <http://sbd.or.jp/index.html>

ネポン株式会社(東京都渋谷区・農用機器(施設園芸用複合環境制御装置 等の製造と販売) <http://www.nepon.co.jp/>

株式会社神木(東京都中央区・BAR) <http://ginza-bar.com/>

JGAPキーパーソン・インタビュー

朴 範 鎮

Beom JinBak

韓国・営農組合法人ノルメインサム
代表韓国の生産者にJGAP認証が
持つ“本質”を理解してもらいたい

隣国・韓国にJGAP認証農場があるのはご存知だろうか。韓国中心地・忠清南道論山市にある営農組合法人ノルメインサムだ。高麗ニンジンの生産・販売を行なう同法人は2011年認証を取得。韓国内のGAPであるKGAP、GLOBALGAP、さらにJGAPを活用し、農場の経営改善に取り組んでいる。なぜ同法人はJGAPに注目し、どのようなメリットを感じ認証を取得したのか。朴範鎮・営農組合法人ノルメインサム 代表に話を聞いた。

パク・ポムジン

1976年生まれ。2001公州大学校農工学科卒業後、父が代表を務めている営農組合法人ノルメインサムに入り就農。2005年忠南大学校最高農業経営者課程修了、2007年農業後継者課程修了、2009年より高麗人参農業マイスター過程在学中。2010年韓国農林水産省長官賞受賞。2010年9月JGAP指導員と審査員資格取得。なお、朴氏が代表を務めるノルメインサムは、韓国中心地にある忠清南道論山市を拠点とし、高麗ニンジンの生産・販売を行なう。朴氏は3代目にあたる。経営規模約17.3ha。主要販路は韓国内の大手流通業者であるロッテマートやイーマートのほか、日本の漢方薬メーカーなど。趣味はスイミング、ハイキング。



韓国政府主導で認証取得農場の数は増えたものの……

——いつ、どのようにしてJGAPのことをお知りになりましたか？ またJGAP認証を取得しようと思われた動機、きっかけはどのようなものでしたか？

2010年、千葉・幕張メッセで開催されたFOODEX JAPANの会で、日本GAP協会が出展し、JGAPを知ったことが直接的なきっかけです。実は韓国にも「KGAP」という認証制度があります。私どもの農場では、高麗ニンジンの分野において韓国で最初にKGAPを取得するなど、もともとGAPに大きな関心を持っていました。JGAPを偶然知り、それぞれの認証を通じて、韓国と日本の農場の現実を経験してみることはとても意味があるのではないかと思ったのです。

——韓国ではGAP認証制度の普及は進んでいますか？ また韓国内の農業経営者の認証制度に対する理解はどのようなものですか？

韓国政府主導で始められたKGAPは、急速に導入が広がっています。KGAP認証を取得した農場数は2011年で約37,000にもなります。ただ、消費者はもちろん生産者もまだGAP認証制度の目的を理解できていないのが現実です。政府がリーダーシップをとるのはいいものの、認証農場の数を増やすことを第一目的としているために詰め込み主義的に知識を植えつけるだけなので、生産者たちの多くはGAPに対する本質的な理解は低いと言わざるをえません。

ただ、韓国では農産物認証として「低農薬認証」「無農薬認証」「有機農産物」の3つのカテゴリーがあり、このうち「低農薬認証」が2014年に廃止されます。そのため、安全な農場で生産された証であるKGAP認証の農産物が求められる動きが広がっていく可能性が高く、それにとまって生産者のGAPそのものに対する理解が深まって認証農場数がさらに増えていくと期待しています。

——ノルメインサムでは、KGAPはもちろん、JGAP、さらにはGLOBALGAPも導入されておりますが、これらを導入して農場はどのように改善していらっしゃいますか？

以前に高麗ニンジンの収穫量を増やすことだけが目的で、品質は二の次でした。それに環境や消費者の安全のための施策をすることなど頭の中にはありませんでした。しかし、GAP認証導入によって、親環境農

業に取り組む(註・韓国では「環境保全型農業」を「親環境農業」と呼ぶ)、安全な農産物を生産することが最重要事項であるという認識を持つようになりました。農薬の誤用・濫用をストップすることができましたし、農作業事故も減りました。高麗ニンジンを移植する畑をきちんと土壌検査をするようになったら、以前にあったように衛生上の問題点から出荷を差し止められるようなこともなくなったんです。韓国の消費者から大きな信頼を得ることができ、販売量が増えたのはとてもうれしいことです。

日本の農産物生産工程管理に学ぶべきこととは

——韓国内でJGAP認証制度が普及していくためには、どのような課題があるとお考えですか？

農産物流通において、世界の中で最も厳格な基準になっているJGAP認証を取得して海外に輸出ができることについて、韓国の生産者の間では関心を集め始めています。福島第一原発事故等で日本の農産物に対して風評被害を避けようと、厳格な基準を採用して素早く対応している日本GAP協会の姿を韓国の人たちに知らせていくべきです。韓国国内食品展示会等に参加してアピールするなり、日本の輸入業者が韓国の農産物に対しJGAPに準じたレベル安全性認証を求めようとなることも、韓国の生産者の意識をJGAPに向けるきっかけになるかもしれません。また、当社でもできるだけ多くの人にJGAPを知ってもらうべく様々な広報活動を行なっています。

——日本の農業界・流通業界・加工業界・GAP協会関係者に対してノルメインサムからのメッセージをお願いします。

すべての過程で徹底に点検している日本国内の農産物生産・流通のシステムは、高度経済成長をしている韓国とはいえ、まだまだ学ばなければならない点が多くあると思っています。特に生産の過程を重視する日本のシステムを習わなければならないと思います。世界はもう地球村になっています。お互いの競争を通じて消費者が安全で良い農産物を食べることができるようにすることは、日本だけではなく韓国の生産者たちにとっても宿題といえるでしょう。また両国の生産者が、お互いに信頼を築き協力していくことができれば、両国の農場の農産物は、世界市場での誰もついてくることのできないぐらいの競争力を持つことができるはずです。